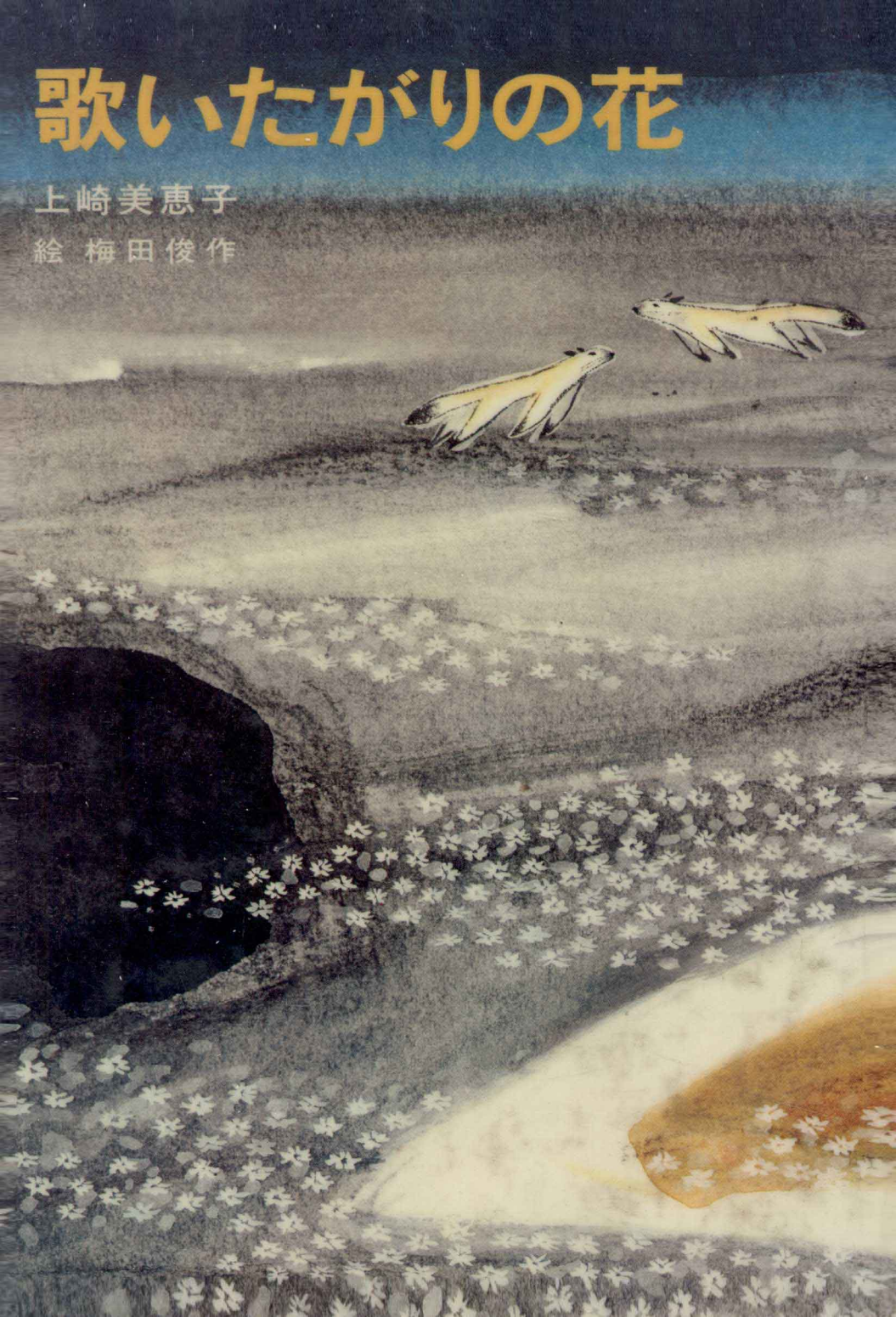
歌いたがりの花

上崎美恵子
絵 梅田俊作



歌いたがりの花

上崎美恵子／作 梅田俊作／絵

913

上崎美恵子

歌(うた)いたがりの花(はな)

講談社　1980

228p　22cm（児童文学創作シリーズ）

こうざき　みえこ

歌(うた)いたがりの花(はな)

昭和55年8月28日　第1刷発行

定価980円

著　者　上崎美恵子(こうざきみえこ)

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話　東京03(945)1111(大代表)

振替　東京8-3930

印刷所　廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所　株式会社　堅省堂

© 上崎美恵子　1980　Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8093-190183-2253 (0)　　(児一)

目次

1 ふしぎな花 …… 6
2 こがらしの夜 …… 18
3 山の神さま …… 24
4 朝の電話 …… 36
5 かけ落ち …… 43
6 若い警官 …… 50
7 ふたりのミヨ …… 60
8 光るコック帽 …… 66
9 雪のりんご園 …… 78
10 白い乗用車 …… 85
11 山荘の夜 …… 97
12 おてんき先生 …… 110
13 がけの上のアトリエ …… 121
14 花咲く野原 …… 128

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

15 ある疑惑 143
16 遠い日の記憶 156
17 みやげはチョコレート 165
18 林の中の廃屋 175
19 まぼろしのほのお 185
20 明けがたの海で 195
21 雪のトンネル 201
22 あの日のできごと 208
23 星の日 220
あとがき 226
著者紹介 228

歌いたがりの花

1　ふしぎな花

スカイラインからおりてきたバスがとまると、リュックをしょった小学生たちが、われがちにレストハウスの売店をとりかこんだ。

「これ、なあに？」

「ふくろうぶえ、どうやってふくの？」

「ぶどう一かご、いくらですかあ。」

小学生たちの声がミヨのまわりでとびかう。

「それは木でつくったピッケルよ。ぶどうは一かご五百円……。まって、まって、ふくろうぶえ、いまふいてみせますから……。」

長い二本のおさげにリボンをむすんだミヨは、大ぜいの客にかこまれても、このごろはあわてなくなった。

春の終わりに、このレストハウスへきたときは、どうしていいかわからずに、ただ、おろおろとしてしまったが……。

レストハウスの従業員宿舎で寝起きするようになって半年――、いまは客の応対にもすっかりなれた。

スカイラインの山すそにひろがる果樹園からは、なしやりんごやぶどうがとれる。レストハウスの売店にも、うすむらさきのつぶに白い粉をふいたぶどうのかごがならんでいる。

そびえる連山の頂上近くを、うねうねと走るグリーンスカイラインが開通したのは、七年まえだ。スカイラインができてから、ミヨのすむ町は、きゅうににぎやかになった。スカイラインの出入口にあたるからだ。

町の駅には急行列車がとまるようになり、観光バスも一時間おきにでる。

ミヨが身をよせているレストハウスは、スカイラインのゲートに近い町はずれにあって、ここでしばらく観光バスが停車する。バスの車庫が近くにあって、給油したり、運転手が交代したりするからだ。

そのあいだにバスからおりて、パーラーでコーヒーを飲んだり、売店で買い物をしたりする客がいる。

小学生たちが先生のふえを合図に、またバスにのっていってしまうと、ミヨはほっとして目の前につらなる山なみをながめた。

青空にくっきりと稜線を見せる連山の中腹までが白い雪におおわれると、スカイラインのゲートは春までとざされるのだ。

「よ！」

はずむような声にふりむくと、そばにシロウが立っていた。
「オレンジジュース。」
シロウは、町のオオタタクシーの運転手だ。タクシー会社では最年少で、きらきら光る歯を見せてわらう顔なんか、まだ少年のようだ。売店では生ジュースも売っている。
「帰り車？」
ミキサーをまわしながら、ミヨはきいた。ミキサーの音がうるさいので大声になる。
「ああ、パノラマ台のホテルにお客さんを送ってきたところ。」
シロウの声もまけずに大きい。
「パノラマ台のあたりはひどい寒さでしょう？　あそこはかなりの高さだもんね。」
紙コップにジュースをいれてわたす。
「ホテルじゃ、ぼうぼうストーブたいてたぜ。お客は車からおりたとたん、ぶるぶるさ。」
「夏でも、山からおりてきたお客はおどろいてるもんね。セーターもってくればよかったなんていって。」
ジュースをひといきに飲んでしまうとシロウは、
「ごちそうさん！」
と、いそがしそうに車にもどっていった。町のタクシーも、スカイラインがとざされるとめっきり客がへる。いまがかせぎどきだ。
シロウは町の中学をでてから、集団就職で東京へいったが、しばらくして故郷へもどり、オオタ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

タクシーの運転手になった。
「おれ、山が見えない生活がつづくと、気がおかしくなっちゃうんだ。」
だから故郷へ帰ってきたのだとシロウはいう。
ミヨは町の中学の三年生だ。両親がなくなってから、おじにひきとられて中学へかよっていたが、卒業してから就職することにきまったレストハウスの経営者が、
「従業員宿舎があいているから、いまからきていてもいいんだよ。売店でアルバイトしてもらってもいい。」
とすすめてくれた。
おじの家はせまいし子どもが三人もいる。ミヨはおじ夫婦には自分からいいだして、レストハウスへ移ってきた。
日曜・祭日は売店をてつだったりして、自転車で町の中学校へかよっている。卒業したらレストハウスで働きながら、列車で三つ先のミドリ市の定時制高校へいくつもりだ。いまいるウエートレスのタカちゃんも、そんなふうにしてミドリ市の定時制を卒業した。
従業員宿舎で寝起きしているのは、支配人兼コックのオガタさんと、タカちゃんとミヨの三人だ。レストハウスの周囲はなし畑だから、夜は静かでおちついて勉強もできる。
オガタさんは一階の調理場の横の六畳間に、ミヨとタカちゃんは二階に二間ある四畳半に、ひとりずつはいっている。もうひとりのウエートレスの岸さんは通いだ。
この店の経営者は駅前に大きな食堂ももっているから、ほとんどそちらにいっていて、月に二、三

度しか顔を見せない。支配人のオガタさんにすべてをまかせている。
オガタさんは、長いあいだ外国航路の貨物船にコックとしてのりこんでいた人で、定年退職してから故郷の町へもどって、レストハウスにつとめた。
町の家にはむすこ夫婦も孫もいるが、
「こっちのほうが気楽さ。」
と、従業員宿舎にとまりこんでいる。

シロウのタクシーが町のほうへ走りさったあと、売店の後ろのパーラーからタカちゃんがでてきて、
「あらっ、シロウさん、もう帰っちゃったの？」
ときいた。
「そう、ジュース飲んでっただけ。あの人もいそがしそうね。」
「ひどいな。パーラーに声かけていかないなんて……。」
タカちゃんは、となり町に高校時代からのボーイフレンドがいるが、どうやらシロウにも好意をもっているらしい。
ミヨもシロウがすきだ。
すき……というより、尊敬している……といったほうがいいのかもしれない。
はじめてシロウの名を知ったのは、運転手仲間のうわさでだった。
レストハウスでコーヒーを飲みながら、三、四人の運転手がわらっていた。仲間のひとりがスカイ

ラインを走っているとき、すれちがった乗用車に伝言をたのまれた。つれの乗用車とはぐれたので、さきにいっているとつたえてくれと、ナンバーをおしえられたのだそうだ。その若い運転手は、伝言をつたえるために、スカイラインを一往復してしまったという。

「それも空車でだぜ。正直の上に、ばかがつくよ。」

「ほうっておけばすむのによ。」

そんなうわさをきいて、仲間にわらわれている若い運転手に、ミヨは好意をもった。

売店にくるシロウと話をするようになってからは、好意のほかに、一種の尊敬が加わった。

あるとき、シロウがジュースを飲みながら、こんなことをいったからだ。

「おれ、タクシーころがしてても、ぜったいに人身事故だけはおこしたくないな。」

「でも、目の前に、だれかがとびだしたらどうするの？」

と、ミヨはきいた。

「そのときは、せいいっぱいの技術でさけるさ。おれの車が山からついらくしても……。もちろん、お客がのってない空車の場合だけどさ。」

そのときから、ミヨはシロウを尊敬するようになった。

ミヨの両親は交通事故で死んだ。

駅前でくだもの店を経営していた両親は、ある夜、商店会の寄り合いの帰りに、横断歩道でトラックにはねられた。信号無視のトラックはそのままにげさり、ひきにげ犯人はついにつかまらなかった。ミヨが六年生のときだ。

そのせいで、ミヨはシロウのことばによけい感激したのかもしれない。
それに、シロウにはほかの人にはないふしぎな力があるような気がする。
あの……、口ぶえをふくきみょうな花を見つけだしたのだから……。

夏も終わりに近い日の午後だった。
ミヨは夏休みのあいだじゅう、毎日のように売店をてつだっていたが、あるとき、団体客にかこまれていたミヨに、シロウがつと近づいて、
「ほいよ。」
白い花がついた草のくきを、ミヨの上っ張りのポケットになげこむようにさすと、さっさと車にもどっていった。
いつものように、生ジュースを飲みにきたらしいが、売店がこんでいたので、えんりょしてしまったらしい。
そのときはミヨも客の応対に気をとられて、シロウに声もかけられなかった。
ところが団体客がいってしまったあと、ミヨの耳には楽しげな口ぶえがきこえてきたのだった。
バスがいってしまうと、いままでの混雑がうそのように、客がとだえることがある。
売店にも、後ろのパーラーにも、そのとき客はいなかった。店の横の駐車場にもとまっている車はなかった。
それなのに、だれかが口ぶえをふいていた。

ミヨは国道のほうを見た。乗用車が一台、猛スピードで走りさったが、歩いている人はいなかった。
ふりむいたが、パーラーにはタカちゃんや岸さんの姿もなかった。客がとぎれたので、調理場で休んでいるのかもしれない。
だいいちタカちゃんや岸さんは、口ぶえなんか、ふいたことがない。オガタさんもそうだ。
口ぶえは、ほんとに耳のすぐそばできこえた。
ミヨは気味がわるくなって、しばらくじっとしていた。
だれかがミヨとむかいあって、ふいているような近さだ。
ミヨは深呼吸をして、両手を胸の上でくみあわせた。
りい　りい　りい……
うきうきするような明るいメロディーだった。
たぶんその人はすごく楽しい気分なのにちがいない。
ミヨはまた一つ深呼吸をした。
胸の上でくみあわせた手を、そろそろとおろした。
そのとき、右手がなにかにさわった。
（あ、花……。）
さっきシロウがなげこむように上っ張りのポケットにさしていった花に気がついた。
ミヨはポケットから花をぬきとった。
口ぶえは、ますます高まった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com